富士商會

神田で地域防災セミナー開催

地震と水害リスクを啓発

創業百年を超える保険代理店の富士商會（東京都千代田区、中江宏社長）は11月8日、東京都千代田区のエッサム神田ホールで「災害時　命を守るにはあなたならどうする?」のテーマで防災セミナーを実施した。神田東紺町会との共催で開かれた今回のセミナーは、地域の住民を対象に昨今猛威を増す自然災害について学び、防災減災への啓発を目的としたもの。講師は災害対策に取り組んでいる工学博士の土屋信行氏。会場には約60人が参加した。

「知って、恐れて、備える」大切さ強調

今年は元日に能登半島地震が起き、さらに9月には同じ能登地方で豪雨災害による甚大な複合災害が発生している。昨今、猛威を振るう自然災害にいかに備えるか―。

仲田氏

土屋氏

秋山氏

東京の中心地に暮らす住民にとっても重要な課題となっている。

講師の土屋信行氏は工学博士で、東京都で道路・橋梁・下水道・街づくり・河川事業に従事。江戸川区土木部長も歴任し、現在はリバーフロント研究所技術参与などを務めている。著書に「首都水没」「水害列島」「災害列島の作法」がある。

午後6時半から始まった防災セミナーで司会を務めた富士商會の仲田重明部長は「能登半島では地震に続き豪雨となり、自然災害が年中発生している状況だ。そうした中で災害が発生したらどうすればよいか講演いただく」と講師を紹介した。

講演に移り、土屋氏は200人以上が犠牲となった西日本豪雨災害を例に出し、当時、避難指示が出て逃げた人は何人いるかと参加者に質問した。土屋氏は97%の住民が逃げなかったとして、洪水や地震をわが事として受け取れるイマジネーションが必要だと指摘した。

地元の参加者でにぎわった防災セミナー

続いて1月1日に発生した能登半島地震の映像を紹介。住宅の倒壊や津波、海岸の隆起の様子などを映し出し、地震や洪水は同じ場所で繰り返すだけに準備を怠らないよう注意を促した。建物の耐震化についても、新耐震の住宅は揺れに対して無傷だった点も強調し耐震化の重要性にも言及した。

土屋氏は東京の水害の歴史についても述べ、明治43（1910）年の東京大洪水をはじめ、カスリーン台風（1947年）、キティ台風（49年）、狩野川台風（58年）など過去の水害や、最近の台風19号などによる被害を紹介。「洪水は自然現象、水害は社会現象」だとして、東京という低地で暮らす人々にとってどう安全に暮らすか。水害を災害にしないような対応が求められると強調、「知って、恐れて、備える」大切さを訴えた。

また、土屋氏は自然災害を補償する保険について東日本大震災時の例を出し、「保険に加入していた人と未加入の人では天国と地獄ともいえるほどの違いが出た」と伝え、保険の重要性も伝えた。

講演後、仲田氏が富士商會を紹介。昨年12月に環境省が策定する中小企業向けの環境マネジメントシステム「エコアクション21（EA21）」の認証を取得したことを報告した。

セミナーの最後のあいさつで、同社の秋山正勝取締役は土屋氏の述べた「知って、恐れて、備える」という言葉は、その頭文字をとって「S、O、S」と覚えるとよいとアドバイスした。

今回のセミナーでは参加者に対して土屋氏の書籍が配られたほか、千代田区からハザードマップや東京防災の書籍が提供された。

参加した住民からは「災害をわが事と考え、イマジネーションを豊かにすることが印象に残った」といった声、また、火災保険について「耐震については割引があるが、自然災害全体に対応した等級制度等を含めるのはどうか」といったアイデアも寄せられた。